

に、こういった平和ができたということ、これを私たちは尊いものであるといったことを充分語り継いで、子供達に教えねばならない。これが私たち戦前、戦後を知っている者の責務です。

私は、そのひとつの方法として遺骨収集をしているわけでありませう。

体験記執筆者の泉信潤老師は、平成十一年二月八日、テナン島の洞窟で遺骨収集の際、死亡されました。現地からご自宅に参りました悲しいお知らせの電報には次のように記されていたとのことです。

「二月八日午前十一時ころテナン島カロリナス岬にある堅穴（深さ約三〇メートル）で海岸線に沿って洞窟を探索中、行方不明となり、午後十二時ごろ現地チャモロ人を通じて警察へ通報する。その後陸上から海上を搜索、そして午後五時ごろ警察によりカロリナス岬沖の海中にて遺体で発見……」

ここに謹んで冥福をお祈りいたします。

ニューギニア特別陸戦隊

生き残り、その後の歩み

高知県 岡田浩揮

生きて帰れぬニューギニアと言われる戦闘から、運よく昭和十九年一月内地に無事帰ることができた。

私たち佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の生き残り組は、命からがらニューギニア島からパラオ島経由で、昭和十九年一月一日大分県佐伯港に入港したが、「負け戦」のことが外部へ漏れることを恐れた軍部は、全員に対して完全なる「箝口令」を言い渡し、その日のうちに佐伯港から潜水艦で豊後水道を瀬戸内海に入り、広島県呉海兵団のある呉の港に入った。

艦から下りた私たちは、呉駅から列車に乗ってその夜遅く佐世保駅に着き、佐世保海兵団第十分隊（補充分隊）へ入団した。

この第十分隊は、各前線で戦いに負けて戦場から引

き揚げてきた兵隊や、艦船が沈没させられて生き残って海兵团へ帰ってきた兵隊たちが、国内に帰還して、次の戦線へ配属されて出発するまでの一時待機している補充分隊である。普通の分隊の人数は、二、三百人から多くても四、五百人であるが、第十分隊は各方面から帰ってきた兵隊たちでごった返し、多い時は六千人以上になることもあった。

私は「考課表」という各兵隊全員の成績表の取り扱いをする分隊士増永博道特務中尉の下で働くことになり、事務系統の仕事であった。

何分にも兵隊の数が多く、かつ第十分隊の滞在期間が短いので、考課表の整理に追いまくられた。早い兵隊では二、三日で分隊を出て行く場合もあったので、その兵隊についての詳細の記事を考課表に記入して、出発する兵隊たちの隊長に必ず持たさなければならなかったのだ、時々夜を徹して仕事をしたものであった。

朝の「立付」というものは、毎朝何千人もの兵隊が整列しているなかで、分隊長が「この列の何十人は○

○へ（例えば「サイパン島の陸戦隊へ」とか）配属する」といったような命令を出して送り出すことである。なかには玉砕部隊と当然分かれている部隊であっても分隊長は送り込まなければならなかった。そして命令を受けた兵隊たちは直ちにその配属先へ転出しなければならなかった。

昭和十九年一月の第十分隊入隊時の私の階級は「海軍上等水兵」であったが、その年の五月一日付で「海軍水兵長」に進級することができたと同時に分隊士室にいたので、下級兵当時のように「制裁」を受けることは全然無くなってきた。これは新兵当時のことや一等水兵当時のことを振り返ると、海軍において兵隊としては大きな喜びごとであった。私は昭和二十年五月一日「海軍二等主計兵曹（昭和十九年九月一日付で「水兵」から「主計兵」に転科した）」に、また昭和二十年八月「海軍一等主計兵曹」に進級した。

昭和十九年七月ごろ、第十分隊の分隊士増永博道特務中尉が、分隊士室の部下である私に向かって「岡田兵長、お前は新兵当時から南方のニューギニア戦線の

激戦地で、一般水兵でもあまり経験のしたことのないような苦闘を続けたので、もう水兵で再び激戦地へ出向くことはないと思う。国のためには十二分に尽くしてきたのであるから、これから先は事務系統の兵隊となつて日本のために働いてもらった方が私はよいと思う。近く海軍経理学校の入試があるから、それを受験してみてもどうだろうか？」ということだった。

実は、私もいつまでも第十分隊にいたことは出来ないので、いざれ再び最前線へ送り出されるだろうと覚悟していたので、二、三日熟考した上で、分隊長室の上官堀内敏夫一等兵曹にこの話をしたところ、堀内兵曹も「私も分隊長のご意見に同感だから」ということになり、すぐ受験の申し込みをして、昭和十九年九月一日、憧れの東京都品川の海軍経理学校に入校することができた。

このように増永分隊長の一言で私の運命は大きく変わることで、命を承らえることができたのである。水兵として再び第十分隊から激戦地に参加していたならば、恐らく私は絶対に生存していなかったと考

えている。人間の運命というものは、いつ如何ように変わっていくかも分からない。

私は昭和十九年八月末、品川海軍経理学校入校のため、佐世保を発つて東京へ向かった。東京の生活は生まれて初めてであった。

昭和十九年九月一日付をもって、それまでの海軍水兵としての兵籍番号「佐徴水四九八七四」であったものが「佐志主九〇一〇」となり海軍主計兵となった。

「徴水」とは徴兵によつて入隊した水兵のことであり、「志主」とは志願して主計兵となった者の呼び名である。当時我々兵隊仲間では、直接の戦闘部隊の兵隊である水兵が一番人気があり、主計兵や衛生兵（看護兵）は「主計看護が兵隊ならば、蝶やトンボも鳥のうち」と言われて馬鹿にされたものだ。

私が入隊した品川海軍経理学校の分隊は第四十二分隊であり、分隊長は熊本県出身の山下次郎海軍（特務）主計大尉で、分隊長は舞鶴鎮守府の兵隊で京都出身の英幡一主計兵曹長で、教員は山本主計兵曹だった。

経理学校の教官となる人物に選出された方々は、戦隊内でも学力が特別に傑出された人々だったので、私どもは安心して勉学に精励できる日々を送った。分隊には伍長と言われる分隊員内では最先任の二等主計兵曹がいたが、私は伍長の次の先任ということで、甲板長といわれる極めて嫌な役に就かされて、勉強以外の雑用に追われて大変な毎日だった。

昭和十九年十一月の終わりのころであった。南の島のサイパン島から、当時としては超大型の爆撃機〔空の要塞〕と言われた)であったB 29が東京の爆撃に来襲した。我々経理学校の兵隊は、第一線部隊に属する兵員ではないので、防空壕の中へも入らず飛行機の行方を眺めていた。地上の対空砲火は各方面から盛んに攻撃を仕掛けるが、相手はビクともしないで所々へ爆弾を投下する。

この飛行機は、一切死角のない爆撃機だったので、日本の零戦あたりが近寄っても全然寄せつけることはなかった。我々が眺めているうち、B 29に近寄った零戦群は一機残らず木端微塵に撃ち落とされてしまっ

た。私がニューギニアにおいて対空戦で戦った時は中型爆撃機であったため、当時の戦闘の様相とはまた違っていた。

ところがB 29の一機が品川湾上でちょっと傾いた。地上の高角砲の弾丸がどこかへ命中したらしい。ユラリユラリと傾きながら高度が下がって行くが、さすがに「空の要塞」だけあって急激に落ちることはない。そのうち搭乗員とおぼしき数人の乗組員が落下傘で飛び下りた。落下傘はユラリユラリ揺れながら品川湾に落ちていった。ほどなくB 29の巨体も品川湾に突入して、物凄い水柱を上げてこの戦いの幕は終了した。

昭和十九年十二月に最後の学科試験を終了し、各分隊ごとに各人の成績が発表された。その日山本教員が私のところへきて「岡田兵長、お前はごく僅かであったが、珠算の成績が福田に及ばなかったので二番に上がった」と話された。福田兵長は珠算では特級の腕前を持つていたのでかなうはずはなかった。昔は、その成績が一番、二番、三番までは天皇陛下の恩賜の金時計が下賜されたそうであったが、激戦の最中だった当時

では、そんなことは一切行われなかった。そしてその時山本教官から「一、二、三番は近い将来に高等科入学は決定されたも同じことだから、その時頑張ってもらいたい」と励ましていただいた。その後数日して、十二月末に我々の勤務する前線部隊の派遣先が発表された。私の勤務先は、当時東洋一と呼び名のあった鹿児島県鹿屋市の九州海軍航空隊の司令部勤務と決定された。ところで私は考えた「俺はニューギニアから内地に還って既に一カ年経った。この辺でもう一度外地の部隊に出ることが将来のことを考えたら一番よい方法ではないのだろうか」ということが頭に浮かんできた。

その当時は、もはや日本近海は米潜水艦の跳梁にやって、我が国の艦船は次々とその犠牲になっていたが、若い私であったからそんなことは全然考えもしなかった。そこで私は、仲の良かった香川県出身の中田主計兵長に、こんな相談をしてみた。この部隊は私よりちょっと後の昭和十八年一月に海軍に入った徴兵で、誠に円満な人物であった。「中田、お前は台湾航

空隊勤務のようだが、俺の行く先と交代してくれないか、俺はどうしても今一度外地へ行きたいと念願しているの、お前さえよければ分隊十には俺から話をつけてみるが」と言ったところ、人の良い中田兵長は「岡田兵長、その返事は今晚一晩考えさせてください」とのこと、翌日まで返事を待つことにした。

翌日、早速中田兵長から返事が届いた。「岡田兵長、昨夜私もいろいろと充分考えてみました、やっぱり私が台湾航空隊へ行くことを決心しました。岡田兵長には誠に悪いと思いますが……」と言うことで、私も諦めざるを得なかった。

しかし、このことがその後の中田兵長と私の運命を大きく変えることになろうとは、神のみぞ知る分かれ目であった。その後、中田兵長など南方方面に勤務する二千人余りの兵隊を乗せた大型商船「箱崎丸（一二七〇〇トン、かつて日米交換船として使用された）」は、昭和二十年一月二十五日に米潜水艦の攻撃により、鹿児島県の遙か西方の敵冬の東シナ海において海の藻屑と消え去ったことを、鹿屋市の九州海軍航空隊

で耳にした。

もし私が中田兵長と勤務先を交代していたならば、中田兵長が辿ったと同じ道を私が辿ったのである。誠に危ないことであった。人間の運命の分かれ目はこんなことである。このことをはっきりと私は肝に銘じたのである。

昭和十九年十二月末、海軍経理学校の課程を終えた私ども兵隊たちは、それぞれ勤務先の実戦部隊へ向かって旅立った。私は鹿児島県鹿屋市にあった「九州海軍航空隊」へ配属となったので、鹿児島へ向けて列車で東京を出発した。恐らく十二月三十一日であったように思う。その日は珍しく南国鹿児島は大雪であった。翌日の昭和二十年元旦に旅館を出発して、鹿屋の九州海軍航空隊へ入隊することができた。そのころ大局的に帝国陸海軍の敗色が鮮明になっていたので、正月も何もあつたものではなかった。

その後、昭和二十年七月、私の勤務している航空隊の飛行場は、沖縄附近から毎日何回となく空爆に飛来する米空軍機の襲撃に追いまくられた。そして飛行場

の真ん中にある司令塔には、その日の当番将校が友軍機の着陸にあたっているが、その下にある地下防空壕は相当地下深く掘り下げているので、いくら大型の爆弾を受けてもビクともしない状態になっていた。我々副官部の下士官は、この当直将校から必ずその日の書類にサインを貰わなければならないことになっていた。それで毎日昼ごろ司令塔まで行くことが日課となっていたが、そのころ副官部の下士官は私のほかに七人くらいいたので、一週間に一回は必ず当番下士官となっていた。

当時の海軍も陸軍も「月月火水木金金」の一週間であるから、土曜日も日曜日も一切なかった。また当時は乗用車もオートバイもなかったので、飛行場中央の司令塔まで行くのには全部自転車である。飛行場中央までは相当の距離があるので、書類を携えて出発すると必ず空襲警報が鳴り始めた。すると、間もなく山の峰附近から敵機が逆落とりに攻撃してくるので、命ながら自転車をこぎまくり、司令塔の地下壕に転び込まなければならなかった。鹿屋基地での私はこの当直

の日は一番嫌なことであった。

我々の勤務していた当時の九州海軍航空隊副官部の副官は斎藤裕氏で、斎藤氏は当時から既に「将来は海軍中将（主計関係は大将にはなれなかった）まで昇進されるだろう」と言われるように優秀な人物であった（元新日鉄の会長で、平成七年勲一等の叙勲に輝いた人である）。

そのころの元気な男子はほとんど軍隊へ入っていたので、事務系統やその他のことは女子挺身隊の人達の仕事であった。ご多分にもれず九州海軍航空隊にも、我々とはとんど年齢の違わない沢山の娘さんが入隊していた。この中で沖縄県出身の長峰という小柄な三十三歳余りの女性がいたが、この女性は女子挺身隊の中でも事務の仕事では抜群の腕前があった。

昭和二十年八月六日に広島へ、また八月九日に長崎と二回にわたる原子爆弾投下によって、戦局は徹底的な敗戦に追い込まれた。

昭和二十年八月十五日のラジオ放送をもって、天皇陛下の終戦に関する玉音放送が流された。鹿児島は東

京から遠く離れているためか、当日の玉音放送は非常に聞き取りにくかった。そして当日の夕方は、我々主計兵全員が部隊前の広場に集合することになって、九州海軍航空隊の主計長から日本帝国の終戦を告げられた。主計長は職業軍人であるから、我々一般の下士官兵とはおのずからその立場が違っていたためか、涙ながらの訓示になったのである。

一度戦後の鹿屋へ行ってみたが、昔の面影はなく海上自衛隊の航空基地になっており、部隊入口の資料館から進入することはできないので、資料館の中にある明治以来の日本海軍の参考資料を見て回るだけであった。

戦時中の我々は鹿屋市内の山の下で、数キロ近く掘り込まれた防空壕の中で、明けても暮れても夜間までも事務をとっていたが、極秘文書を見て来た友人から、在籍軍艦のほとんどが沈没させられたと聞く度に、日本海軍の消滅も間もない出来事だと話し合ったものであった。その極秘文書の中には「軍艦〇〇右帝国軍艦籍ヲ除カル」という記事が毎日のように書かれ

ていて、日本海軍の艦船は毎日のように米潜水艦に撃沈されていたので、戦争に勝てるような情勢では一切なかった。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送と同時に日本国の軍隊は完全に崩壊した。私も、それぞれの所属部隊から各自の故郷や落ち着き先に帰ることになり、八月二十日ごろまでその準備に追われたが、私も三カ年離れていた故郷へ急いで帰ることになった。

ところで、何分にもその当時陸海軍に集まっていた兵員の数は、国内でも莫大な人数に上っており、その大勢の若者が一斉に列車に乗り込むことになったので大変な騒ぎになってきた。鹿屋駅前には長蛇の列になり、いつ列車に乗り込めるか分かったものではない。来る列車も来る列車も鈴なりの状態で、屋根の上にも大勢の引揚兵でひしめき合っている。

私たち主計科の兵隊たちは、話し合いの結果、自動車利用を計画して、友人の下士官の懇意な百姓に交渉したところ、ボロのトラックではあるが志布志駅まで

行ってくれることになった。しかし志布志駅も列車を待つ兵隊たちで沸き返っている。さあ、これからが大変である。私は大分県の別府港から豊予海峡を渡って四国へ行かなければならないので「どんな方法があるのだろうか。噂によれば、アメリカ軍が日本兵を見つけたら、その場で引っ捕らえて拷問にかけて殺すらしい……。ともかく急いで四国へ渡らなければならぬ」との思いだけであった。これは、後で考えれば全く馬鹿げた噂ではあったが、その当時はこんな話があったことしやかに取り沙汰されたものであった。私は、この志布志駅で九州各地へ帰って行く四、五人の友人たちと分かれ、一人で志布志駅で別府行きの列車を待つこととした。

ところが、思いもかけずにその翌日の夕方、私は列車に乗ることができた。その時は随分大勢のようであった兵隊たちは、鹿屋駅から見れば遙かに小人数であったからだ。そしてその当時の列車のスピードときたらまさにガタゴトガタゴトであったので、翌日の昼ごろようやく別府駅に到着し、ホテルで宿泊することが

できた。

さあこれから四国行きの船に乗らなければならぬ。別府で方々船を探したが、四国行きの船は見付からないで困っていたところ、ホテルのボーイが「お客さん、金を出したらヤミ船に乗れないことはないですよ」と言ってきたので「船賃はいくらいるのか」と聞いた。「一人二百円出せば八幡浜まで行けるそうです」と言う。今の時代なれば幼児でも喜ばない金額だが、昭和二十年の二百円は大金であった。しかし、その船賃を出さなければ郷里へ帰れないので、しかたなく私はボーイに二百円を渡し、ヤミ船に乗ることとした。夕方船着き場へ行くと、目的の船は普通の漁船だが、すでに二〇〇人くらいのお客が待っている。中には私たちのような兵隊たちが十人くらいいた。

だいぶ天気が悪く、小雨が横殴りに降っていたのに船は出港するというので、午後八時ごろその船に乗り込んだ。そして午後九時ごろ港を離れ、暗闇の海を進行了した。「このまま予定通り行けば、午前二時ごろには八幡浜に着くだろう」と思いながら昼間の疲れもあ

ってウトウトして二時間ばかり眠ったと思ったら、急に目が覚めた。というのも、気が付くと船の動揺が激しくなってきたからだ。船長が大きな声で何か叫んでいるので耳をそばだてたところ「台風の中へ船が乗り込んだから、海軍さんの兵隊さんは見張りに立ってください」と叫んでいたのだった。私は飛び起きて船長のところへ行って「冗談じゃないぞ、お前は台風のさなかへどうして船を出したんだ」と怒鳴りつけたが仕方がない。今まで私が乗った船は、戦艦「金剛」のような大きな船や小さい船であっても南太平洋の穏な海の上であったので、今更仕方がなく四、五人の兵隊とともに私は舳先へ立って見張りをした。

後で分かったことであつたが、その時大きな台風が四国・九州方面を通過していて、その真っ只中に我々は乗り込んだのだった。しかし、その当時は、終戦のどきどきで台風情報どころでなく、そのような情報はほとんど分からなかったのであつた。揺られ揺られて午前五時を回ったが、船は大波の中をどこに居るのか定かでない。遂に午前十一時過ぎにようやく八幡浜港

に入港することができ、ほっと胸を撫で下ろした。普通であれば五時間ぐらいでゆっくり行ける船旅が、実に十四時間余りの悪戦苦闘の連続でやっとのことで到着した次第であった。しかし台風の通過が思ったより大分早かったらしく事なきを得たわけである。

私は八幡浜駅から列車に乗って松山市へ入った。松山市から久万町を経由し、高知県の佐川町へ国鉄バスで向かっていたが、バスがないのでトラックの荷台で輸送していた。私はそのトラックの荷台へ立って運転席の屋根の鉄棒を押さえて久万町まで行った。夕方久万へ到着したので、面河館という旅館で一泊し、翌日今度は国鉄バスに乗って国道三十三号線の佐川駅下車し、次は列車に乗ってようやく伊野駅まで到着することができた。そのころは輸送機関も時間がかかり、伊野駅に着いたのが夕方になっていた。伊野駅で下車した私は、それからは歩くしか方法がないので、徒歩でブラブラ仁淀川沿いの狭い道を歩いて午後十時ごろ小川村の自宅へ三カ年ぶりに帰着することができた。

連絡もしていなかったので、祖母はびっくりすると

共に大喜びで、有り合わせの野菜などで食事を作ってくれた。その時、祖母の話によると、母と妹と二人の弟は、昭和二十年四月に満州に渡り、八月終戦となつてからは一切音信不通であるといつて心配していた。

後で分かったことであるが、この年、満州で現役兵として徴集されていた弟の精夫が、満十八歳で昭和二十年十一月二十九日に戦死し、母は同じく十二月二十日に満州国奉天で病死し、一番下の満十六歳の弟富行は昭和二十一年三月に、妹の静子は昭和二十九年の夏ようやく帰って来た。後で、この妹から満州国での母や弟妹のことを聞かされたが、それもまた筆舌に尽くし難い苦しみの連続であったようだ。

今思えば、この戦争のために私の家族も実に惨憺たる結果となつてしまった。「満州開拓義勇軍」とか「分村計画による満州移民団」等の美名の下に駆り出された農家出身の国民は、終戦と同時に異国の天地において悲惨極まりなき結末を余儀なくされたのであった。

いつの時代でもこのような状態になった時、哀れな

る最期を迎えるのは、末端の庶民であることを考えると、私は、我が胸が張り裂けるように感じる次第である。

昭和二十年八月下旬、帰郷していた私に、鹿児島県鹿屋市九州海軍航空隊司令部より「残務整理のため、経理兵は速やかに原隊に復帰せよ」との通知が届いた。

九三年ぶりで、ようやく故郷の土を踏むことができ、たこの身が、終戦になったとはいえ、再び軍隊生活に呼び戻されても、二度と行く気にはならなかったが、やはり若い時であったので、渋々でも鹿屋市に戻らなければならぬかとも思った。

昭和二十年九月初め、高知駅を出発して高松港から連絡船で、宇野、岡山を経由して原爆で潰滅的な打撃を受けていた広島市を通り、その日のうちに大分県宇佐町まで行った。

広島市では、列車の停止している間にホームに下り外を見たが、原爆により市内は廃墟と化し、無惨にも壊れ果てた駅前の家々から、憔悴し切った人達がポツ

ポツとうごめいている姿が見受けられ、まことに気の毒な限りであった。

宇佐駅のホームの外のコンクリートの上で横になると、腰の痛いのも構わず、即、朝までグスリと眠ってしまふことができた。今思えば、若い当時の足腰の強靱さには、ただ驚くばかりだ。翌朝起きた時の足腰は一切痛さが残っていなかった。

その日の列車で鹿児島高山駅まで行き、ひとまず下車してから航空隊へ立ち寄ったところ、基地の司令である飛行少佐が「経理兵なら、鹿屋へ行かずにこの基地に留まって、ここの残務整理をやって欲しい。鹿屋基地へは私が連絡して了解をとっておくから」ということになった。

私自身としても、鹿屋基地には、既に進駐米軍部隊が入り込んでいることを聞いていたので、あまり乗り気ではなかった関係もあり、高山基地司令の誘いの言葉は渡りに船であった。高山基地の書類は、鹿屋と違っていろいろ難しい書類も多かったが、一カ月ぐらいの間に大体の骨格が出来上がったので、昭和二十年十

月初め、高山基地の司令に申し出て帰郷することになり、十月五日高山を出発して、ようやく自由の身となり故郷に帰り着くことができた。

今度の帰宅には、列車便で福岡、広島、岡山経由で宇野港から高松を経て高知駅へ下り立ったが、前回の帰郷と違ってどの町も若干落ち着きを取り戻していたように見受けられた。

しかし、高知市は空襲で焼け野原になっていて、駅前から見ると、今の上町五丁目付近まで丸見えだったことを覚えている。

その日は電車で伊野まで帰り、それから自宅までの三〇キロ余りの道を歩いて帰った。当時はバスも何も走っていないかったので歩くしかなかったのである。

【解説】

☆九州海軍航空隊

昭和一九・七・一〇ヨリ 二〇・九・二終期マデ

内地 戦務丁（昭和一九・七・一〇編成）

筆者の岡田氏は自らは台湾航空隊を望み、中田兵長に申し入れたが、中田兵長は「やっぱり私は台湾航空隊に行く決心をした。岡田兵長には誠に悪いと思いますが……」と断われ、それが岡田、中田両氏の生死を分けたと記されている。

昭和十九年末当時は、既に本土決戦準備の時期である。いわゆる「決号作戦」のため陸海軍ともに本土防衛を最重要としていた。

昭和二十年七月五日、小澤海軍総司令官は概略次の如き指示を提出（大海指第五二五号）。

- 一 本土作戦ヲ決号作戦ト呼称ス
- 二 決号作戦ニオケル決戦方面ハ大本営コレヲ決定ス

三 海軍総司令長官ハ敵情ニ応ジ機宜作戦方面ヲ予令（警戒下令ヲ例トス）以テ作戦指導特ニ戦力ノ機動集中ニ遺憾ナカラシムベシ

この時点における海軍部の状況判断を、豊田軍令部

総長は七月七日、次のように奏上した。

一 当面ノ敵情判断

イ 敵ハ本月中旬、新作戦ヲ実施スルノ算極メテ
大ナリ、……本土ニ対シテ一挙来攻ノ算極メテ
少ナク……支那沿岸基地獲得作戦ニ出ヅベシト
判断シアリ

ロ 敵機動部隊ハ……東海方面又ハ本州東方面ニ
於イテ作戦開始スル算大ナリ

ハ 敵ノ準備兵力左ノ如シ

航空兵力 米一八乃至二〇隻、英五乃至六隻基

幹

地上兵力 一五乃至二〇箇師団

二 当面ノ作戦指導ノ腹案

一 航空作戦

特別ノ場合ノ外一部兵力ヲ以テ主トシテ敵輸送
船団ニ対シ好機短切ナル攻撃ヲ加ヘ極力敵撃摧ヲ

図ルヲ本旨トス

1 種子島、五島或ハ濟州島ニ対スル敵ニ対シテ
ハ所要兵力ヲ以テコレガ企図破摧ニ務ム

2 南西諸島ニ来攻スル敵ニ対シテハ好機一部兵

力ヲ以テ短切ナル攻撃ヲ加ヘ其ノ進行ヲ阻害ス

ルニ務ム

3 中支沿岸ニ来攻スル敵……其ノ進行ヲ阻害ス
ルニ務ム

4 敵機動部隊ニ対シテハ特ニ兵力ノ温存ヲ主ト

ス、但シ敵ガ攻略部隊ヲ伴イ種子島、五島或ハ

濟州島攻略ヲ企図シアルコト明ラカナ場合、輸

送船団攻撃ニ特ニ支障アルトキハ、一部兵力ヲ

以テコレガ支援阻止ニ務ム

二 水上水中特攻戦力戦 | 略 |

海軍総体は、既に航空兵力の展開準備を充足してい
たが、七月二日軍令部総長が奏上したところによれば
次である。

決号作戦航空兵力展開配備

九州 計 一五八五

攻撃実用機 | 二四五、同練習機 | 九七〇、

制空 | 三二〇、偵察 | 一五〇

四国 計 四二九

攻撃実用機―一三五、同練習機―二四〇、
制空―一五〇、偵察―四

中国 計 五四五

攻撃実用機―一六五、同練習機―一六〇、
制空―二〇〇、偵察―二〇

近畿 計 四七〇

攻撃実用機―一一五、同練習機―一六〇、
制空―一六〇、偵察―三五

中部 計 三一三

攻撃実用機―一六〇、同練習機―一八〇、
制空―七〇、偵察―三

関東 計 六六五

攻撃実用機―二二〇、同練習機―二五〇、
制空―一八〇、偵察―二五

奥羽 計 四五〇

攻撃実用機―一五〇、同練習機―三五〇、
制空―一五〇

朝鮮 計 一六八

攻撃実用機―七五、同練習機―九〇、偵察―三

機種別合計 四六二五(内 桜花 二、三〇)、

攻撃実用機―一一五五(内 桜花 二、三〇)、

攻撃練習機―二三〇〇、制空機―一〇三〇、

偵察機―一四〇

右表の如く、地域別にある如く、九州地域が航空兵力の主力をなし、桜花(特攻用、親子機)も関東と共に機数は多い。

潜水艦の戦闘

南鳥島補給戦

愛知県 大谷 夙

志願して海軍に入った。その三年間は、軍艦「三限」で海上勤務を体験。さらに潜水艦教育訓練を受け「伊号一二二」潜水艦、「伊号一二三」潜水艦、「波号一〇六」潜水艦の勤務を経て、「波号一〇二」潜水艦で終戦を迎えた。諸般の情勢には逆らえず、一番危険な部隊として最初に復員させられることとなる。